

第三部

新生の道元

十二卷本『正法眼蔵』をめぐって

一章 資料について

道元の晩期の思想を問う際、十二巻本『正法眼蔵』の考察は大きな比重を占める。その十二巻本『正法眼蔵』をめぐって近年議論がかまびすしい⁽¹⁾。それを考量しつつ、私なりに晩年の道元について考えてみたい。

まず最近の十二巻本をめぐる議論は鏡島元隆氏がなしているように⁽²⁾、諸説を七十五巻本と十二巻本のどちらかの優位説と等視説と分け、さらに十二巻本優位説のなかでも重視説と偏重説と区別して、いづれが妥当かと問うことが主題となっている。その点について基本的な二つ疑問がある。

一つは、なるほどそう分類できるような諸説が出されているが、しかし、どちらかが優れているとか、同じだとかいうことは、そもそもその人がどちらを優れているとするか、あるいは同じとみるかという、いわば個人の道元評価の問題であつて、客観的に論じられる問題ではないのではなからうか。ただ、これは、たとえば、世親のように、自覚的に思想が変化した場合（小乗から大乘に）は、前の思想とそれ以後の思想の優劣が、本人によつて客観的に明らかにされることがある⁽³⁾。

道元の場合、思想の変化を自ら認めたということとは、伝記上では明らかでない。もつとも、思想の転換を思わせる言葉は、秘密『正法眼蔵』（二十八巻本）《八大人覺》の懷妊そよの後序のような奥書に認められるが、そこで言及される十二巻本の存在が近年までわからなかったゆえ、従来は問題にさえなりえなかったといえる。しかしたとえ思想に変化があつたとしても、その優劣・等視をいうことは、袴谷氏が補説しているように⁽³⁾、道元の著作の内在的問題としては困難であろう。もできるとすれば、ただ真の仏教（仏法）とは何か、という視点からのみできようが、それはもつと難しい問題領域に入る

ことになる。

だから問題は、十二巻本と七十五巻本の優劣・等視であるよりも、晩年の道元の思想がなぜ、どのように変わったかということを明らかにすることであるはずだ。

もう一つはもつと基本的な問題である。それはたいいていの議論が七十五巻本と十二巻本を同じ水準で並べて論じているが、両本のあいだには同水準にはおけない事情があるのではなからうか。

懷牂の《八大人覺》奥書にはこう書かれている。

「仰ギ以おもんミルニ、前ニ撰ズル所ノ仮名正法眼蔵等、皆書キ改メ、并ビニ新草具サニ都とら盧壹百卷之ヲ撰スベシト云々」。

これによつて、七十五巻本とは別に十二巻本が書かれたのではなく、その書き改めと新草として十二巻本が位置付けられていることがわかる。

だが、この自明なはずのことが十分には明らかにされていないようなので、その点についてまず論じたい。

この奥書の懷牂の言葉の内実は、十二巻本と七十五巻本を合わせて見てみればよく分かる。七十五巻本の《出家》は十二巻本の《出家功德》と《受戒》へ、同じく《伝衣》は《袈裟功德》へ、《発無上心》⁽⁴⁾は《発菩提心》へ、《大修行》は《深信因果》へと書き改められている。⁽⁵⁾

すなわち秘密『正法眼蔵』《出家》の奥書に「右出家後ニ御龍草本有リ、之ヲ以テ之ヲ書キ改メルベク、仍リテ之ヲ破ルベシ」とあるように、七十五巻本《出家》は、《出家功德》へと新生したのである。「御龍」とは何か分からないが、「御龍草本」とは十二巻本を指すにちがいない。また、《袈裟功德》の奥書には「ときに仁治元年庚子開冬日在観音導利興聖宝林寺示衆」とある。これは《伝衣》の最初の部分が記された日付である。内容的にみても《伝衣》が書き直されたことは明

らからであり、ほぼ同じ内容をもつ巻が二つあってはおかしい。つまり《伝衣》は、道元において《袈裟功德》に書き直されたのだから、かつて示衆された《伝衣》がすなわち《袈裟功德》であるので、《袈裟功德》にその日付が入り、もとの原稿《伝衣》はいらないものである。《発無上心》《発菩提心》は元来巻名が全く同じであり、両者ともに寛元二年二月一四日の奥書を持つ写本もある。

曹洞宗は一般的には、つい最近まで本山版『正法眼蔵』（九十五巻本⁽⁶⁾）として一体化された『正法眼蔵』しか知らなかったため、つい八十七巻『正法眼蔵』というべきだという意見が出たりする⁽⁷⁾。そういうところから、鏡島元隆氏のように七十五巻本は「弘法篇」、十二巻本を「救生篇」などと言うことがまかり通るのではなからうか⁽⁸⁾。《伝衣》《袈裟功德》を考えただけでも、そのような言い方は成り立つまい。

今見たように、十二巻本と七十五巻本は同じ水準ではなく、四巻の重なりを含んで、上層と下層とでもいえるような構造をもつのである。上層下層といっても単純ではない。七十五巻本の劈頭におかれた《現成公按》は、「これは天福元年中秋のころ、かきて鎮西の俗弟子揚光秀^{ようこうしゅう}にあたふ。建長壬子拾^{しゅう}勒」と奥書に書かれている。これは文の調子からみてもただ拾い収められたというだけでなく、再治された書である。《仏性》も様々な書き改めが施されている。また十二巻本の中にも奥書に、「未及中書清書等、定御再治之時有添削歟」「帰依仏法僧」、「未及中書清書、定有可再治事也」「深信因果」と書かれているものもあり、《三時業》のように別本があるものもある。つまり上層にも草稿があり、下層にも書き改めがあるのだ。

ここでもう一つはつきりさせておきたいことは、すでに杉尾玄有氏が明らかにしているように⁽⁹⁾、十二巻本を新草というのはふさわしくないということである。新草とは、「書き改め」以外の予定百巻本中の書き下ろしである。したがって現存

する「新草」とは、《供養諸仏》・《帰依仏法僧》・《三時業》・《四馬》・《四禪比丘》・《一百八法明門》・《八大人覺》の七巻である。それゆえ大久保道舟氏の次のような考えは成り立つまい。

「一定の宗意に基づき編集された七五巻の旧草を用意した上、さらに二五巻の新草を加え、合わせて一〇〇巻に達する体系を完結するべく第二次の撰述、編集を開始した。」⁽¹⁰⁾

資料についての問題はもう一つある。書き改めるべき草稿は、必ずしも七十五巻本だけではない。《現成公按》のように、以前に書いた巻に《法華転法華》《菩提薩捶四攝法》《生死》がある。《法華転法華》は仁治二年に慧達禪人に書き与えられたものであるが、こちらはおそらく道元の手元に戻されたまま、未再治で残されたと思われる。《菩提薩捶四攝法》は仁治三年に書かれた。ほかに《唯仏与仏》⁽¹¹⁾《道心》⁽¹¹⁾が、奥書なしで秘密『正法眼蔵』だけに存在する。百巻の草稿としては、これらも顧慮されてよからう。

ところで書き直された十二巻本の五巻の「書き改め」はかなり全面的であることから見て、他の「書き改め」も、大幅な改訂が期されていたのだろう。しかしその道元の意図は、建長五年正月六日《八大人覺》を書く頃には断念された。

断念された百巻本について、その体系構想が種々議論されているが⁽¹²⁾、そもそも道元が体系を構想したかどうかというところさえ問題である。七十五巻本（六十巻本も）も特別な体系があるとはいえない。『正法眼蔵』三百則もそうである。なるほど百巻にする意図はもっていただろう。その大部分はすでに示衆し、草稿のあるものだ。けれどその順序次第はもはや我々には見当がつかない。たとえ見当をつけてみても、憶測の域を一步も出ることにはできない。十二巻本最後の「八大人覺」は、まもない死を自覚して、釈迦に倣つての最後の説法としてなされたのであり、なんらかの体系の中の最後の一巻ではありえない。したがって百巻の構想については議論の外であろう。

したがって、問題はやはりなぜ、主に七十五巻にまとめられている寛元四年以前の諸巻⁽¹³⁾（旧草と呼ぶ）から、およそ異質な体裁をもつ十二巻本（やがて百巻）へ、書き改めや新たな起草がなされたのか、そこで思想はどう異なってきたのか、ということに収斂されよう。

加えて《八大人覺》の奥書は、もうひとつ特異な問題を浮かび上がらせる。

私は、「我等、不幸ニシテ一百巻ノ御草ヲ拜見セズ、尤モ恨ム所ナリ、若シ先師ヲ恋慕シ奉ラン人ハ、必ズ此ノ十二巻ヲ書シテ之ヲ護持スベシ」という言葉を非常に重いものと感じる。この懷辨の言葉は、歴史的に無視され続けたということもあつて、深く考えさせられるのである。十二巻本が七十五巻本と滑らかに続くならば、懷辨はこれほどまでに嘆くだろうか。たんに百巻までは完成できなかったというのであれば、十二巻本と先に撰した『正法眼蔵』（おそらく七十五巻本にちかいもの）を、並べて「護持すべし」といえなくてはならない。七十五巻本について、もつともよく知っているのは懷辨である。また自分が大部分清書したのであるから、一番愛着をもつていい人である。その懷辨が、この十二巻を書いて護持しろというのだから、十二巻本がどのようにそれまでの巻と違っているのか、よくよく気をつけて見ねばなるまい。たんなる上層下層とはいえないような断絶が十二巻本と七十五巻本の間にはある。

そのゆえか十二巻本は一九三〇年能登の永光寺で発見されるまで、全く知られなかった。『歎異抄』が蓮如によって秘匿されたように、おそらく内容的な問題で、それは敢えて秘匿されたのであろう。そうでなければ、二祖懷辨の言葉を守って大事にされたはずである。以上が本題に入る前の予備的考査である。